

「私達に不可欠な言葉と命と光」

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は初めに神と共にあった。3 すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。

4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった(ヨハネ1章1節-5節)。

植物が育つためには水・酸素・光(太陽)が必要だと言われますが、人間にも不可欠なものがあると聖書は言います。今日、読みました短い聖書の言葉の中には私達にとってとても大切な三つのキーワード「言葉」「命」そして「光」が記されています。そして、これらは全てイエス・キリストを表すものなのです。今日はこの聖書の言葉からクリスマス为背景にして、この三つのことをお話します。まず第一に「初めに言葉があった」ということです。

初めに言葉があった

日本を旅行しますと、我々日本人はとてもユニークな感性をもっているということに気がつきます。うっそうと木々におおわれた山道を歩きますと、道端にお地藏さんや小さな祠があったりして、そこには数時間前に供えられた花や食べ物が置かれていたりします。樹齡が何百年にもなるような御神木と呼ばれる大樹が日本の各地にあり、それが信仰の対象となっています。新年になれば何百万という人が御来光を拝むために日の出を待ち望みます。我々日本人はこのようなものを前に神聖な思いを持ち、それらを前に手を合わせるのです。

サンディエゴから車で五時間ほど北に行きますと、そこには世界一の大木があります。そうです、セコイヤ国立公園にあるシャーマン将軍という樹齡2200年の大木です。私は何度かそこに行きましたが、その大木の前で手を合わせている方を見たことはありません。日の出に関しても、例えばグランドキャニオンやイスラエルのガリラヤ湖に上がる日の出に手を合わせている人を見たことはありません。

このようなことを話して日本人が優れているとか、他国人には宗教的な感性がないということをお話ししようとは思いません。大樹や日の出を前に手を合わせなくなる気持ちというものを私も理解できます。なぜなら、それらの背後には天地万物をその御手におさめている神様がいるからです。しかし、私にとりまして太陽は燃える巨大な物体であり、大樹も厳しい自然環境を生きながらえてきた植物であり、それらは神様の創造物なのです。

自然の背後にいらっしゃる神様に対する畏れを感じとることはとても大切なことです。しかし、それだけでは私達はこの神なる存在がいかなるものであるかとい

うことを知ることはできません。御来光を30年、見続けたとしても大樹の前に20年、断食をして座り込んでも、そこから私達は神様が私達に対して何を望まれているのか、何を語りかけようとしているのかを知ることはできません。

そう、私達がそのことを知るために不可欠なものは「言葉」なのです。言葉を聞くことがなければ、私達は具体的な生活の指針を得たり、励ましや戒めを得ることはないからです。ですから、ヨハネがここで「はじめに言葉があった」と書いていることはとても大切なことなのです。「はじめに言葉があった」ということは神様が世の始めから、言葉をもって人との関係を持つということ、すなわち神は私達の人生に深く関わることを望んでおられるということを言い表しているのです。

明らかにこれを書いたヨハネの頭の中には創世記の一章の言葉があったに違いありません。神様が世界を創造した時、その時に神様はまず「光あれ」と言われました。そうすると「光があった」と創世記は書いています。ヨハネが3節において「すべてのものはこれによってできた」(3)と書いています。すなわち、神の言葉が発せられるところに、事が起きた。それが聖書の言葉の力なのです。

詩篇33篇6節には「もろもろの天は主のみ言葉によって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた」とあります。これは今、お話ししましたように神の言葉には新しい世界、新しい状況を創造する力があるということです。

詩篇107篇20節には「そのみ言葉をつかわして、彼らをいやし、彼らを滅びから助け出された」とあります。これは実際に私達の傷ついた心と体が癒されるということです。また道を迷い滅びに至るところから、私達を助け救い出す力が神の言葉にはあるということです。

イザヤ55章11節には「このようにわが口から出る言葉も、むなしく私に帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送った事を果たす」とあります。これは神の言葉が私達に語られ、私達がそれを信仰をもって受け止めていくなら、その言葉がむなしいものにはならない、その送られた先で事を成すということです。

これらが神の言葉の内にあるものです。故にこの聖書の言葉が語られない日曜日の礼拝はないのです。そして驚くべきことに、この後の14節を見ますと「この言葉が肉体となった」というのです。言葉が肉体となるとはどういうことか?と思いますが、その肉体とはイエス・キリストであり、すなわちそれはクリスマスの出来事を指しているのです。

すなわちイエス・キリストがお生まれになられたということは、そのキリストご自身が神の言葉を表すということであり、キリストはその行いと言葉によって父

なる神について、人間について、死について、命について、愛について、恵みについて語られ、自らこれらのことを私達にあらわしたということなのです。

もう10年以上前になりますが、サンディエゴの博物館に死海写本が展示されたことがあります。その時は博物館に入館する時に空港に匹敵するようなセキュリティ・チェックがなされました。そりゃそうでしょう、それはイスラエルの宝なのではなくて、人類の宝なのですから。

私達は去る二月、その写本に書き写された文字を注意深く写し取った人間達が暮らしていた共同体の遺跡をイスラエルで見してきました。コピーなどない時代、彼らは来る日も来る日も、当時彼らの手元にあったこの死海写本よりもさらに古い写本から(もしかしたらそれは原本だったかもしれませんが)、その言葉を一字一句、書き写したのです。そして、完成したものは天然の洞窟の中に置かれ、それが2000年後に発見され、今日、私達の前にあるのです。これらのことを思う時に私達はこの神の言葉なる聖書が長い年月、神によって守られ、その時が来た時に神は世界にその言葉を明らかにしたということを知るのです。もし、この言葉が今、私達の手元になれば、私達は「あぁいい感じー」「あぁ一癒される」「ぞくぞくするー」と言い表す以外に神について知る術はなかったのです。そうなりますと当然、この教会はありませんし、私はここで皆さんに語らせていただくことは何も無いのです。私の人生訓とか体験談とか、そんなことを一年中、聞いていても仕方ありませんでしょう。

今日、私達の周りには言葉が溢れています。例えば20年前と比べて、私達は当時の何十倍もの情報を瞬時に知ることができるようになりました。まさしく現代は言葉が飽和しているような時代です。私達の肉体が過剰なカロリーを接種しますと色々な問題が起きてきますように、私達は今、これまでの人類が経験したことがない過剰な言葉に囲まれています。まだこのようなことになり年月はそんなに経っていませんが、いつの日か、このことが人間の心身に与える影響というものに分かってくることでしょう。そう、その研究テーマは「知らなくてもいい、どうでもいいことを過剰に知るようになった人間の心に関する一考察」ということになるでしょうか。

預言者アモスは、紀元前八世紀に神の言葉を授かり、それを民に語り続けた預言者ですが、彼はこんなことを後世に書き残しました。主なる神は言われる、『見よ、わたしが飢饉をこの国に送る日が来る。それはパンの飢饉ではない。水にかわくのものでもない。主の言葉を聞くことの飢饉である』(アモス8章11節)

確かにこの世界には今も飢饉があります。飢えがあります。飲料水を得ることが極めて困難な国地域もあります。しかし、これらのものが既に過剰に満たされている国地域もたくさんあります。アメリカや日本の経済がおもわしくないといいながらも、私達はダイエット、すなわち過剰に肉体に供給されたものを減らさな

2016年12月4日(日) 「私達に不可欠な言葉と命と光」

ければならない現実に向き合っています。同じように、私達を取り囲んでいる言葉も既に飽和状態なのです。

25年前、私がアメリカにいました時には、二か月かかって船便で届いた日本からの小包の中に包装紙として使われていた二か月前の日本の新聞を隅から隅まで読みました。今、そんなことをする人はいません。インターネットにより私達は日本で暮らしているのと同じ膨大な情報を閲覧することができるからです。しかし、アモスは現代を預言するかのように、そんな言葉が溢れている時代において、人は主の言葉を聞くことの飢饉にあえぐだろうという神の言葉を書き残しました。そう、そのことはすなわち「知らなくていい、どうでもいいことを大量に知るようになった人間が、知るべきことを知らないゆえに起きている心の飢え渴き」と言うことになりそうです。

私達はこの礼拝においてそんな私達が知るべき言葉を毎週、聞いているのです。なんで、私達は毎週、「一日一生」を受け取っているのでしょうか。私達が食事を毎日とるように、私達の魂にも霊の糧が必要だからです。私達はそのようにして生きるように神によって造られているからです。このことを他のことによって埋め合わせようとしても、それはできないのです。インターネットから世界中の言葉をかき集めても、それらが私達の魂を満たすことはできないのです。そして、その神の言葉が肉体をもってこの地に来られたというのがイエス・キリストなのです。

二つ目のことをお話しましょう。ヨハネはさらに驚くべき事にこの言葉には命があると書いています。二つ目のポイント、「言葉には命があった」ということを見ていきましょう。

「言葉に命があった」

お話ししましたように私達の周りには言葉が溢れています。しかし、そんな言葉の洪水の中にながらも、「この言葉には命があるなあー」というようなことを私達は滅多に言いません。そもそも、言葉に命があるということはどのようなことなのでしょう。

先ほど、お話しましたヨハネは「イエスは言葉」であり、私達の内に宿った、すなわちこの世界にやってこられたと言いました。すなわちこの言葉に命があったということは「イエスの内に命があった」ということであり、聖書はそのイエスの命は私達にも与えられるというのです。そして、このキリストにある命は私達が世の中で使っている命とは全く違うというのです。

沢木耕太郎という作家が「深夜特急」という本を書いています。その本は彼が若い頃に飛行機を使わず路線バスや汽車で香港からロンドンまで旅をしたという旅日記となっています。その彼がおもしろいことを書いています。その時、彼はいくつかの簡易ベッドが無造作に並べられているようなインドの安いドミトリーに

滞在していました。そのような安宿には世界中からのバックパッカーが集まってくるのです。

今日、休みになると海外旅行を楽しみ、リタイアしたら時間を気にせずに世界中の国々をめぐるみたいと夢を描いている人はたくさんいるかと思います。その時の沢木さんも彼がその旅を通して出会った若者達も、そんな夢を社会の安定というものと引き換えに早々に実現していました。彼らには「いつまでに日本に帰らなければならない」という心配はなく、「朝の起床時間」もなく、もっといいますと「その日の予定」もなく、夏がくれば北半球にある世界遺産を、冬がくれば南半球にある世界遺産を自由気ままに回ることが出来るような、そんな夢のような生活ができるのです。中にはそんな生活を何年もしている者達もいたのです。

沢木さんは、ある朝、滞在しているドミトリーで、数年前に母国を出たという若者が死んだ魚の目のような眼(まなこ)でボンヤリと天上を眺めているのを見たか書いています。それを見て、沢木さんは「まずい、ここにジッとしてはいけない」と思ったというのです。なぜなら、その目に命はなく、まさしくそれは死んだ魚のような目だったからです。言うまでもなく、その若者は実際には死んでいないのです、確かに彼の心臓は動いていましたし、おそらく健康にも問題はなかったことでしょう。ですから確かに彼は命を持っていたのです。しかし、聖書が言っている命とはこの類の命ではないのです。

特にこのヨハネはこの「命」ということを数多くとりあげておりまして、その数は実にこのヨハネ伝の中だけでも35回以上あるのです。その一つ、ヨハネ6章30節-40節を特に見てみましょう。ここには二週間前のサンクスギビング礼拝でお話ししました神がイスラエルの民に荒野で毎日、天から与えたマナという不思議な食べ物について触れています。

30彼らはイエスに言った、「わたしたちが見てあなたを信じるために、どんなしるしを行って下さいますか。どんなことをして下さいますか。31わたしたちの先祖は荒野でマナを食べました。

それは『天よりのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。32そこでイエスは彼らに言われた、「よくよく言うておく。天からのパンをあなたがたに与えたのは、モーセではない。

天からのまことのパンをあなたがたに与えるのは、わたしの父なのである。33神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」。34彼らはイエスに言った、「主よ、そのパンをいつもわたしたちに下さい」。

35イエスは彼らに言われた、「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない。36しかし、あなたがたに言ったが、あなたがたはわたしを見たのに信じようとはしない。

37父がわたしに与えて下さる者は皆、わたしに来るであろう。そして、わたしに来る者を決して拒みはしない。38わたしが天から下ってきたのは、自分のこのころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。

39わたしをつかわされたかたのみこころは、わたしに与えて下さった者を、わたしがひとりも失わずに、終りの日によみがえらせることである。

40わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」。

ここに書かれている「パン」とは私達の口から入り私達の肉となり血となる食物です。人々はかつてイスラエルの民が荒野において、神からマナと呼ばれるパンが与えられ、それによって養われたということを知っていて、そのような肉の糧をイエスに求めたのです。しかし、イエスは興味深いことに35節において「私こそが命のパンだ」と言われたのです。そして、こう言われたのです「わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない」(35)。

先ほどの若者は確かに口から食物をとり、その肉体の命は保たれていたのです。しかし、このイエスが言っている命に彼は生きていませんでした。彼はおそらくその目をもって世界のあらゆる国々を見て回ったに違いありません。私達がどうかこうにか一週間の休暇をとって、どこそこの観光地を見て回るというようなことを彼は日常的にしていたのです。しかし、そのようなことをしても心の中の飢え乾きが満たされることがなかったのです。もはや、人々が素晴らしという場所を訪れ、それらを見続けてきた彼は今や、何を見ても感動はなく、魂を失ったぬけがらのように、ただボーンと天上を眺めていたのです。

皆さん、神の言葉にはこのような人間を本当に生かす命があるのです。この命なるキリストはヨハネ5章40節において言われたのです「あなたがたは命を得るためにわたしのもとにこようとしなさい」。この若者も最初は見たことのない世界をこの目で余すところなく見てやるという期待と共に母国を旅立ったのでしよう。そして、世界の各地で人類の遺産と呼ばれるような自然や建築物を見て回ったのでしよう。しかし、彼はそれらのものをことごとく見て回っても、自分の心の渇きを満たすことはできなかったのです。どこに行っても「本当の命」を見いだすことができなかったのです。

私達はこのキリストが与えると約束してくださっている命をお持ちでしょうか。この若者はこの命を見いだすために世界を巡り歩く必要はなかったのです。イエス・キリストは馬小屋でお生まれになりました。なぜですか？なぜなら私達が神の位に近づくことなど決してできないのですから、神が私達の生きる世界にお生

まれになったのです。しかも近寄り難い身分立場や私達が生きるのとは全く場違いな王宮ではなく、誰でも近づくことができる馬小屋で赤子という姿をとられてキリストはお生まれになったのです。

だからイエスは嘆いたのです。「私はこの地に来たのに、真の命を得るために私の元にこようともしない」と。この青年は身近にあるこの本当の命に気がつかず、世界を廻り、途方に暮れていたのです。このような人はこの青年だけではなく、この世界に無数にいます。クリスマスは私達が誰でも「あなたに真の命を与えよう」とおっしゃるイエスの元に行く事ができることを宣言している日です。キリストの命は今、あなたの目の前にあります。今日、それをいただきたいのなら「ただいま、在庫がありませんから来年のクリスマスまでお待ちください」と追い返されることはありません。今日、あなたはそれを手に入れることができるのです。3つ目のことをお話しましょう。それは「命は光であった」ということです。

「命は人の光であった」

ヨハネは『そしてこの命は人の光であった。5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった』(ヨハネ1章1節-5節)といます。このヨハネ伝だけでも21回以上、「光」という言葉が出てきます。「あなたこそ日本、もしくはアメリカの希望の光です」と言われる人が時々います。しかし、やがてその人達の名前は忘れられていきます。ましてや、その人自身がお亡くなりになれば、もはや「その人が光です」と言われることはありません。その光は極めて期間限定的なものなのです。

ここでヨハネが名指ししているその光はイエス・キリストです。今日、このキリストをピーターパンのように想像上の人物と考えている人はいません。確かにこのお方は2000年前にユダヤのベツレヘムでお生まれになりました。そして、その2000年前にお生まれになった方が今日も私達の光となっています。

これは普通ならありえないことです。先ほども申し上げましたように「あなたこそ私達の希望で、光です」というのは普通、今も私達と共に生きている人に言う言葉だからです。でも、今日もこのキリストを光として絶望の淵から立ち上がる人が後を絶ちません。

先日、ある若い方がこう尋ねてきました「神がいるのになぜこんな不公平が世界にはあるのですか」。自分には十分な寝食が与えられているのに、世界にはそうではない人がたくさんいる。これは不公平じゃないか。誰もが心に思うことです。皆さんもそんなことを思ったことはありませんか。なぜ、あの人がこんな苦しみを受けるのか。なぜ、悪人が罰せられることがないのか。このようなことを考えますと、私達は世界が様々な疑問と不確かさで満ちている暗闇に思えてくるのです。

私はその方に言いました「確かに世界は不公平に見えます。そして、そうになると神は何をやっているのだ。神こそが不公平の源ではないかとも思えます。でも、

結論を急いではいけないのではないのでしょうか。今は不公平に見えるけれど、必ずその帳尻を合わせてくれるお方が神なのです。帳尻とはてんでバラバラの長さのものが最終的には皆、その長さが整えられるということです。本当に不公平な世界とは、真っ暗闇の世界とは、その帳尻が全くないことです。すなわち最終的に帳尻を合わせて下さる神がいない世界です。

私達の過去・現在・未来において私達が経験することだけが私達の全てであるなら、確かにそれは不公平です。その不公平さに大きなため息をつき、無礼講で暴れてしまってもいいとさえ思う人達が世界にはたくさんいます。でも、そうではありません、まだ全ての決算はなされていないのです。そして、その決算が神のみ手であって必ずなされるのなら、世界は決して不公平ではないのです。そのことを知る時に、私達の推測と模索の時は終わり、疑いと不確かさと迷いは過ぎ去ります。暗かった道は照らされ、不安の暗闇に光が照らされるのです。

先に言葉には命があったということについてお話しました。でも、この命について一つ大切な命のことを触れませんでした。その神がキリストを通して私達に与えてくださる命について先ほど開きましたヨハネ6章38節—40節にはこんなことも書かれています。わたしが天から下ってきたのは、自分のこのころのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。わたしをつかわされたかたのみこころは、わたしに与えて下さった者を、

わたしがひとりも失わずに、終りの日によみがえらせることである。わたしの父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」。

ここにはキリストの命とは永遠の命であり、私達の父なる神のみ心は私達がこの言葉なる、命なる、光なるキリストを信じて、永遠の命を得ることなのだということです。そして、この「永遠の命」は私達が誰一人として不公平な、不当な取り扱いを受けないということを約束しているのです。私達が生きたこの地上でのことは全て余すところなく必ず帳尻を合わされる時があるのです。

町に繰り出せば夜でも昼のように明かりが照らされています。それは私達の現実の暗闇を必死になってごまかそうとして、これでもかと灯されているのではないかと思うことがあります。未だ私達の心の中には暗闇があります。様々な疑問や諦め、疑い、失望が私達の心の闇となります。死ということを考えればもう絶望的に思えます。しかし、この光は今もそんな闇の中に輝いているのです。そして「闇はこれに勝たなかった」（ヨハネ1章5節）と聖書は私達に強く語りかけているのです。キリストは私達に光を照らすために、ご自身「光」としてこの地に生まれてくださったのです。

2016年のクリスマスこれから迎えるにあたり、皆さんにおたずねしたいのです。今日お話した主の言葉が皆さんの日々の生活を導き、それが私達が立つべ

2016年12月4日（日）「私達に不可欠な言葉と命と光」

き土台となっているでしょうか。今日お話したキリストの命を私達は受け取っているでしょうか。そして、私達の生涯にキリストにある光は照らされているでしょうか。最後にヨハネが記した二つの言葉をもってこのメッセージを終わらしましょう。

「わたしは光としてこの世にきた。それは、わたしを信じる者が、闇のうちにとどまらないようになるためである」（ヨハネ12章46節）。「光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」（ヨハネ12章36節）。お祈りしましょう。